

# ジュラ問題 : アイデンティティ研究序説 (上)

加太, 宏邦 / KABUTO, Hirokuni

---

(出版者 / Publisher)

法政大学社会学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Society and labour / 社会労働研究

(巻 / Volume)

36

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

45

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

1989-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003183>

# ジュラ問題 — アイデンティティ研究序説（上）

加太宏邦

- 一 はじめに
- 二 ジュラ地方
- 三 ジュラ州
- 四 「州」
- 五 地誌
- 六 ジュラ州創出
- 七 （以下『下』）
- 八 文学・証言
- 九 アイデンティティの円環

## はじめに

スイスのベルン州から、その北部が分離し、ジュラ州という新州が誕生したのは一九七九年一月一日のことである。

ジュラ問題 — アイデンティティ研究序説（上）

本稿は、この「ジュラ問題」question jurassienneと一般に呼ばれるジュラ分離運動を材料として、アイデンティティの諸問題を考えるものである。

本稿の目的は大別して二つある。

ジュラ問題を引き起こした「差異軋轢」を平面上の静止的探究と共に、時間の軸上で注意深く追うこと。それらの多層的、多面的な背景をこの機会に出来るだけ詳しく記録しながら、「出来事」の意味付けのなされかたを分析すること。これが一つの目的。従って、これは歴史研究でもないし歴史的研究でもない。もう一つの目的は、しかし、ジュラ問題をたんに現象としての社会・政治問題として外側からのみ捕らえるのではなく、この運動の動因とメカニズムをアイデンティティの円環という地平に置き直して考えてみようとするものである。すなわち、アイデンティティの創出運動の内的構造を探り出すことにある。これらの目的のために、とくにわたしたちはジュラ問題にかかわった文学者たちにも着目してみた（「六 文学・証言」）。彼らのさまざまな証言がわたしたちの論考のたすけになると考えたからである。たんに「政治」とか「社会」という外在的タームに単純化されて見られがちなこの種の運動に「人間」を流し込み、平行的にこの運動から創造活動を汲み揚げ、いわば実存的アンガージュマンの可能性、不可能性に挑んだのが彼らだからである。彼らの言説の中にアイデンティティという存在様式の模索を探り、かつ、その試みを批判的に検証してみたい。

## 一 ジュラ地方

ジュラ<sup>(1)</sup> Jura はゆるい弧を描いたフランスとスイスの国境をなす山岳地帯の名称である (図—1 参照)。

南北の長さおよそ三〇〇 km、東西の幅五〇 km の三日月形のゆるい弧を描いた形状をしている。この山脈のフランス側はドゥー県 Doubs、アン県 Ain、ジュラ県 Jura にまたがり、スイス側はジュネーヴ州 Genève、ヴォー州 Vaud、ヌシャテル州 Neuchâtel、ベルン州 Bern、ゾロトゥルン州 Solothurn、アアルガウ州 Aargau、シャフハウゼン州 Schaffhausen にかかっている。この山並の中央からやゝ北にかけた部分は、スイス内ではベルン州の北部を覆っていた。少なくとも一九七八年二月三一日までは、その部分は「ベルンジュラ」Jura bernois と一般に限定的に称されていたが、本稿では主題がもっぱらこの地方に限られるので、たんに「ジュラ地方」Jura と呼ぶことにする。

この地勢的なことは、ここに住む人々にとって極めてシンボリックな使われ方をするのだがそのことは六 (文学・証言) でおもにふれる予定である。

このジュラ地方はスイスのフランス語圏の一部を形成する<sup>(2)</sup>。一方ベルン州の支配的言語はドイツ語 (州人口の七七・五割の母語) である。したがって、ジュラ地方はベルン州内では言語上のマイノリティ差異をしめす地域である。また、面積的にも人口的にもベルン州からはマイノリティである (その他、のちに考察するさまざまな特質から) ジュラ地方の人々を自他共に「有徴」であるとする観念が生まれ、ついにこの地方の一部がベルンから分離するという問題を引き起こしていくのである (図—2 参照)。

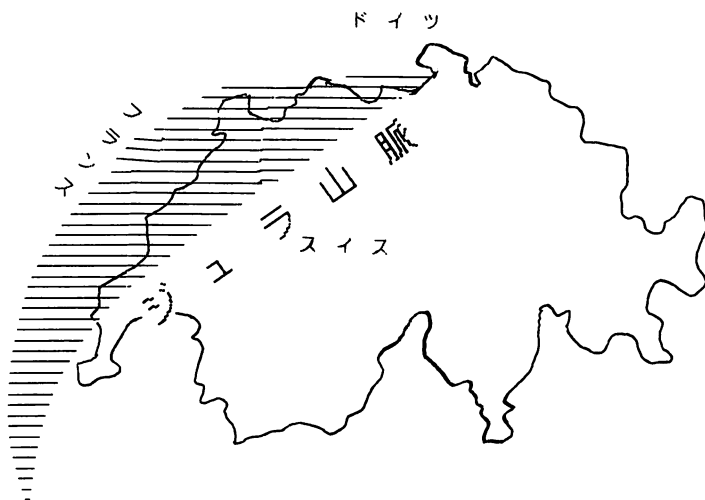


図1 ジュラ山脈

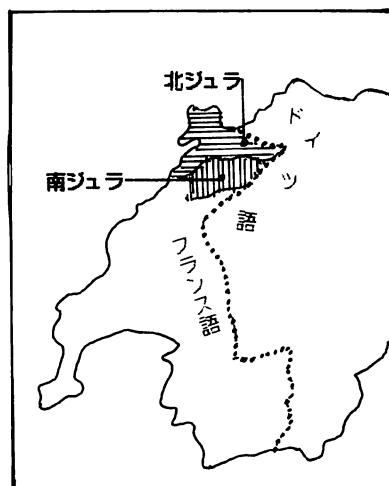


図2 ドイツ語・フランス語言語国境

## 二 ジュラ州

前述のように、ベルン州のなからジュラ州が分離誕生した。この時ジュラ地方はのちに詳しく見るとおり二つに分かれ、北半分のみがジュラ州となり、南半分はベルン州に残留した(図―3参照)。

本稿では、分離した部分を「北ジュラ」Jura-Nordあるいはたんに「北」と呼び、残留した部分を「南ジュラ」Jura-Sudあるいはたんに「南」と呼ぶことにする。<sup>(3)</sup>その総称が上記の「ジュラ地方」(ベルンジュラ)ということになる(図―4参照)。

このジュラ州(北)は面積八三七・四七km<sup>2</sup>(東京都二三区の約一・四五倍)人口は六四、六四五人(一九八六年一月一日現在)で、元のベルン州全体の面積にして約一二割、人口にして約六・八割が分離したことになる。スイス全体の、面積にして二・〇割、人口にして一・一割を占める州である。州都はドゥレモン Delémont (人口一一、六八二人)。州内のコミュニヌ(市町村)の数八二。<sup>(4)</sup>地区<sup>(4)</sup>は三つに分かれる。ドゥレモン地区 Delémont (人口三一、八七三人)、ポラントリュイ地区 Porrentruy (二三、九三九人) フランシュ=モンターニュ地区 Franches-Montagnes (八、八三三人) である。なおこの州はフランスと二二kmの国境を接し、国内の他の州(ベルン州、バーゼル州、ヌシャテル州)との州境の総延長一一kmより長い。このことは、この地方の歴史を見る上でかなり重要なファクターとなっていると考えられる。なお、この地方の地誌的な面については四でふれる。

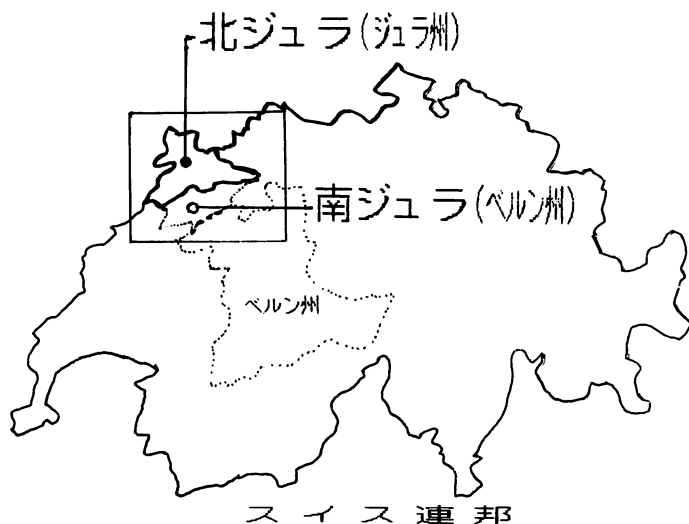


図3 スイス全国とジュラ地方位置図(1989年現在)

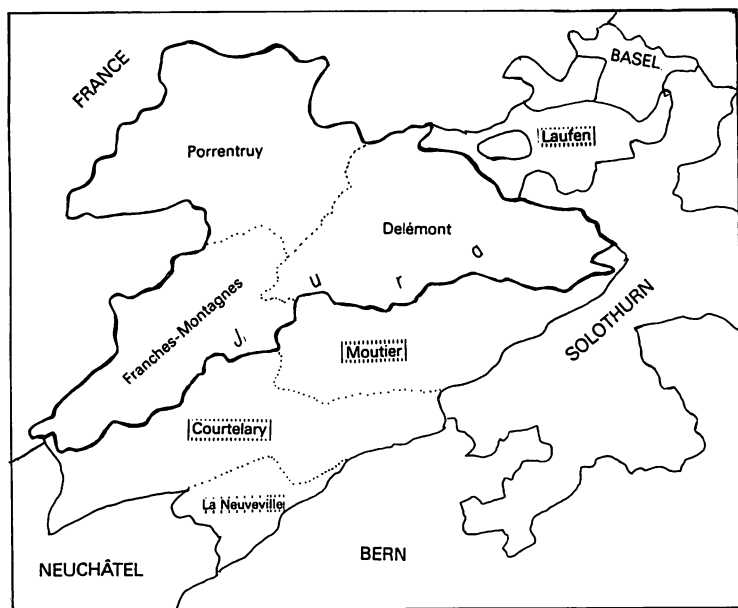


図4 ジュラ州ならびにベルン州内ジュラ地方(南ジュラ)の〈地区〉  
(1989年現在)

### 三 「州」

スイスでの「州」の概念はとくべつに注意をはらって理解をしておく必要がある。州はカントン(Canton)<sup>(5)</sup>の訳語であるが、フランスに存在する「カントン」(一般に郡と訳される)やルクセンブルグなどにある行政上の小区画とは本質的に異なる独立的自治体で、理念的にも実際にも、スイス連邦憲法にもその規定があるように「その主権が連邦憲法によって制限されない限り、主権を有し、且つ連邦権に委ねられていないすべての権利を、主権者として行使する」<sup>(6)</sup>。カントンは独自の憲法、政府、議会を持ち、ひとつの「国」にかなり近い(われわれの知る限りでは、カナダの州はこの数年でかなりスイスに似てきたが、アメリカ合衆国は、独立当時は別として、また理念上は別として、州権は中央に対して必ずしも対抗的でなく、なにより、強大な中央権力がそこに支配している)。

例えば、新生ジュラ州も正式名称は《ジュラ共和国・州》République et Canton du Jura/Republik und Kanton Juraである。その理念的意味は、「ジュラ共和国がスイス連邦の一員として加盟している」と読みかえられるものである。したがって、わたしたちが問題にするこの分離運動もきわめて独立運動に近い性格を持ち、たんに、行政上の分割とか変更などという事務レベルの問題ではないのである。

カントンの下にいくつかの「地区」(district/Bezirk)がありそれらはさらにコミュニヌ(市町村)(commune/Gemeinde)<sup>(7)</sup>にわかれる。しかしこの中央集権的な説明の仕方はスイスではさけた方がよい。実態はコミュニヌが寄り集まってカントンが出来上がっているからである。「上」から「下」へしか矢印の向かない日本のように、国家が暗黙の前提となる地点からは、ジュラ問題は理解しにくい。例えば、連邦憲法には「州民はすべてスイス国民で



(8) である」とあり、あきらかに、州民を主体にして国民を規定している。それも権利の規定の色合いが濃いのである。すなわち「スイス国民」というものはアプリアリに存在しない。また、日本のように村が合併して町に、町が寄り合つて市になるいわゆる市町村合併がむしろ当然だとみなされる国、そういう地点からもジュラ問題のような、規模の縮小を必然的に伴う分離運動の理念は捕らえられない。おそらく、わが国のこの種の拡大・膨張志向(企業合併なども含めて)やスケール・メリットの原理が伝統的に、かつ暗黙に「善」とされる風土は、少なくとも、この点に限って言えばスイスと対極にある文化規範だと考えられる。

#### 四 地誌

「北」と「南」の比較・対比を中心にして、この地方の地誌を概括しておきたい。これは、歴史的経緯などでも見ることであるが、地誌についても両地域の差異に力点を置くか、同一性に力点を置くか、という問題があつて、後に述べる「南」「北」対立に関係して重大な意味を持つてくる。たとえば、「ジュラの水は地中海に注ぐ。ベルンの水は北海に到る」という表現は、たんなる地理の説明にとどまらない「意味」を持ちうる。そして、その延長戦上に「ジュラ人はフランス語を喋る。ベルン人はドイツ語を喋る」というような事実を、ある概念にまで変質させる。なにものかが生れうるのである。

地勢的には南北ともジュラ山脈(中央ジュラの北端部と北ジュラにあたる)の中に位置づけられることは言うまでもないが、「南」はビエンヌ湖から急に立ち上がる起伏の激しい山並(二三〇〇呎〜一五〇〇呎の山頂部と五〇〇呎

く七〇〇呎の谷部の繰り返し) が支配的であるのに対して、「北」は山並が落ち着き、特に、ポラントリュイを中心とする、いわゆるアジョワ地方 Ajoie は卓状ジュラ Jura tabulaire とよばれる平均標高約四三〇呎の台地である。またドウレモン一帯は、平均標高四五〇呎の平らで広い谷地となっている。またフランシュ・モンターニュは標高一〇〇〇呎の高原である。

森はジュラのシンボルのイメージである。ケルト語の *juri*\* (森) から採られたラテン語の *juria* にその名の由来があると言われるジュラはアルプス地方とは全く異なり岩山も氷河もなく最高地点でも一七〇〇メートルほどの森林地帯で、溪流が至る所に流れる湿潤な地方である。

森林面積比という点では、「北」より「南」のほうが多く、農業、牧畜の面からは、「北」のほうが「南」に勝っている。

いずれのジュラにも、時計、金属、繊維、機械、靴、セメント、家具などの産業はあるにはあるが、そのすべてが中小企業的なものにとどまる。

例えば、ジュラ州には、従業員数一〇〇人を超える企業は二六社しかなく、その内の最大の企業 (F. J. Burrus & Cie S. A. タバコ製造 Boncourt 在) でも、その従業員数は五三二人である。またこの二六社のうち九社が時計製造で、さらにジュラ州全体で見れば、企業数一六六の内九一社がこの業種である。就業人口からみても、三九・四呎が何らかの形で時計工業に関係している。しかし、その比率は年々減少し、エレクトロニクスなど先端産業にとって変わられつつある。<sup>(9)</sup>

次に、生活水準であるが、基本的に、スイスは現在世界一の高所得国である<sup>(10)</sup> (国民一人当たりの平均年収は日本が

約一八〇万円に対してスイスは二五〇万円でアメリカの二四五万円の上に位置している）ことを踏まえる必要はあるが、しかし、ジュラ州はスイス内で相対的に一番貧困な地域である。平均年収は一人あたり約一九〇万円程度となっている。<sup>(11)</sup>ベルンに残った「南」はスイスの平均をやや下回る程度であるが、ベルン市を含むベルン地区には及ばない。また、スイス内で一番豊かなツーク州 Zug は四一七万円という年収で、この州間の格差は主に、農業地帯を抱えていない都市州ともいえるツークに有利に働いているのが原因とは言え、実はジュラ問題を考えるときに人々のビヘヴィアに多大な影響を与えた。簡単に言えば、分離に賛成派も反対派もこの経済格差を大きな論点の一つにしたのである。

ベルン離れを願う自治運動＝分離運動に立ち上がった人々はジュラに歴然として見られる「低所得」の原因がベルン側への経済集中という構造にあるとし、自らを被害者と規定した。逆に、反分離に立ち上がった人々はこの構造が現実である以上、ベルンにより接近をはかることがジュラの地場産業育成、活性化に必要なのだという立場を取った。これは植民地における独立派と従属派とにみられる論争と類似した論争かもしれない。しかし、いずれも、かならずしも経済構造の客観的分析からなされた主張ではなかった。分離派、反分離派の大義の一つにつかわれたアジテーションにすぎなかった。

実際に分離してジュラの人々を抱え込んだ最大の経済問題は、一人当たりの税負担の重さであった。スイス平均の指標を二〇〇とすると、ジュラ州は現在、一四三・七で、スイスで一番高く、最も低いのが、やはりツーク州の五七・八となっている。とくに個人負担が高く、ベルン州が一三二の指標に留まっているのと対象的である。<sup>(12)</sup>

ジュラ分離決定投票から一〇年たった一九八四年、また、国民投票（ジュラ州加盟による連邦憲法改正の是非を問

う) から一〇年たった一九八八年にその収支決算とも言うべきものがあちこちで見られたがその評価は相変わらず主観的であることを免れえなかった。

数字の上では、分離前に比べてジュラ州は残留ジュラ(ベルン州ジュラ)よりやや経済、人口の点では向上したと分離主義者は勝利宣言風というが、統計的には必ずしも「好調」ではない、と言われている。<sup>(14)</sup> とくに残留ジュラはベルン州では結果として人口にして七割弱しか占めないマイノリティになってしまったため、いまやベルン全体のフアクターと画然とは区別して把握できないプラス・マイナスがあり、分離と残留のジュラの比較はいきおい都合の良い局所拡大とならざるをえないのである。

政治的な面ではいわゆる中央ジュラ(ヌシャテル州の北部と南ジュラ)はスイスの中では最も革新的地域として知られているが、そのなかでも「南」はいわゆる左派政党への投票率がスイス一である。<sup>(15)</sup> 「北」も決して保守的な州ではない。その憲法の第一条には「ジュラ共和国は友愛を基調とする民主社会国家である」とうたいスイスで最も進歩的な憲法を持っているといわれている。ジュラ州の一九八六年のデータ<sup>(16)</sup>でみると、PDC(キリスト教民主党)三・四・〇二割、PLR(自由党)二九・〇九割、UDC(中央民主連合)一・七五割、PSJ(ジュラ社会党)一八・七三割、PCSI(中立キリスト教社会党)一一・九七割、POP(労働・人民党・共産党)二・〇六割、CS(社会主義闘争党)二・三七割という得票率である。しかし、この政党と分離運動には必ずしも明確な相関関係がなかった。むしろ人々が支持政党を離れて個別に分離、反分離の立場にたったことはある意味ではこの問題の複雑さをかなり軽減した。とくに分離後の政体の主導権争いに分離運動への貢献度とか功績などというものが入り込むことはなかった。政治的な意味で党派的に動くということがなかったのは、国是のわりあい一致したスイスでは一般的傾向でもあるが、ジュ

ラ問題にもそれが反映したとすると、この分離運動の性格を既存の政治的・党派的イデオロギーから分析することはとくに慎まなくてはならない。

## 五 ジュラ州創出

「ケベック州代表ど……」

ドアに二人の中年紳士が立っている。二人ともマスクをしていた。

「……スイスのベルン州ジュラ地方代表でござい」

「ケベックとジュラ。両方とも同じ問題は抱えて居る。」「……」どっちもフランス語は喋る。フランス語を喋る為に、周囲から見つ言うど、少数民族に成つて居る。んで、どっちもフランス語で一本化してえ、つまり、ケベックはカナダ国がら、ジュラ地方はベルン州がら分離独立ば為てえもんだと思つて居る」

井上ひさし 『ちりちりブン 第九』（17）  
『吉里吉里人』第九章

ジュラ地方は九世紀の終わりごろまでは、ローマ帝国領土だったりブルゴンド族、フランク族の住む地方だったりしたがブルゴーニュ公国が成立するに及んで、その領地となった。しかしその支配形態は極めてゆるいあいまいなもので住民に直接利害関係があつたのは狭い地域の領主にあたる支配者であつた。たとえば、ムーチエ・グランヴァル

Moutier-Granval (現在のムーチエ〈地区〉にほぼあたる) はここにあった修道院領地であった。

この領地を西暦九九九年にブルゴーニュのルドルフ三世がバーゼルの司教アダルベール Adalbero 二世〔九九九年から一〇二五年まで司教在位〕に献上する所からジュラ地方の複雑な歴史が始まる。

バーゼルの司教領はその後、三世紀ほどに渡って徐々にその領土を周辺に増やし続け、現在のジュラ地方と呼ばれるほぼ全域をカヴァーするに至る。この南進がビエンヌ (ビール) Bienne/Biel 湖で止まったのは一三五三年に「スイス」に八番目の州として加盟したベルン州が既に湖の北側までの領土を確定し、「スイス」を形成しつつあったからであり、またもつと重要な理由として言語の国境がそこに存在していたからだとおもわれる。この言語国境は、スイスの西部でラテン語が俗化 (フランス語化) していく過程で、これに対して北からのアレマン族がアレ川に沿って侵入しスイスの言語がゲルマン化した時にも破られなかった。これは、ジュラ山脈の壁が文化の要害になっていた証である。こういう点にもジュラ人の中守りのシンボルとしてのジュラと言う意識が深層的に働いていると言える。

後に分断する南北ジュラは少なくともこの時点では領土的にも言語的にもまた宗教的にも一つだった。さらにベルンとも無関係の独自の地方だった。またバーゼルの歴史とも没交渉である。バーゼルは一五〇一年にスイスに加盟している。

しかし、バーゼルの司教領 (正式には司教公国) での封建支配技術はとくに高度なものでなかった。司教領の支配体制は、時代と地域で多様なため、一律に述べることがむづかしい。しかし、このジュラ問題の視点からは次のことを確認しておけばよいだろう。司教領は神聖ローマ帝国の支配下にあったが、この遠隔操作に必ずしも従順でなく、

司教は常に、影響力を弱めようと試み、それはしばしば成功していたこと。従って、ここではテル伝説を紡ぎ出すような、ハプスブルク家へのリアルな抵抗感なく統治は推移していった。もうひとつは、司教公国内は、実質的には、教会・修道院参事会だけでなく「貴族」と呼ばれていた世俗の領主、地主を始めとし、いわゆる第三身分と呼ばれるブルジョワ（ビエンヌ、ラ・ヌーヴヴィル、ドウレモンなどの町代表）、自由村の代表、他の州の領土のためそこに派遣された代官などによる混合支配が機能し、住民とバーゼル司教との直接の関係を緩やかなものとしていたこと。この三段支配は、ジュラの住民にとって、彼らのアイデンティティを侵すような意味での抑圧者を差異化し抽出するには、複雑かつあいまいな領域が大きすぎた。それは、彼らのアイデンティティの無自覚的自律性とも言えるし、一方差異の混沌状態ともいえる。

こういう中で、'ビエンヌ Bienne'、ラ・ヌーヴヴィル La Neuveville、'ディエス Diesse'、オルヴァン Orvin、エルゲル Erguel、サン・チミエ St. Imier など、ベルン州に地理的に接する町や村（従ってバーゼルから遠隔地）が、一方で隣のベルンと同盟を結び始める<sup>(19)</sup>。もともとこれはあくまで、一種の相互安全保証の同盟であるから、宗主あるいは領主の鞍替えではない。例えば、ムーチエを例にとると、領主の権益をめぐる、司教座聖堂参事会に選ばれた人物がベルンからの横槍で追われそうになり、それに対抗して立ち上がった住民にベルンは武力介入をしこれを鎮圧にかかった。このような場合、ベルンの威圧に対処するため、親ベルンではなくても、敵対するよりも同盟を結ぶことで支配・従属関係避け、かなりの緊張関係を維持しつつも、司教領の枠内で自治を保持していくのである。ムーチエはこのようにして、一四八六年四月二九日ベルンと都市間同盟を結んだ。ベルンに接する南ジュラは必然的に北とは異なる保身を要したのである。この南北の差異は、ベルンとの位置関係の差の質的変換であり、その質の差異が後の

さまざまな差を波及的に産み出していくのである。

一六世紀に入つて宗教改革の波がこの地に及ぶとベルンがいち早くプロテスタント化した。この影響を受けて、同盟を結んでいる南ジュラから改革が進み、カルヴァンの協力者ギヨーム・ファールレルの熱心な布教とあいまって、プロテスタントは急速にジュラ全域に広がっていった。しかし、北上して行つた宗教改革の波は南下するカトリック死守の波に妨げられ、今の南北ジュラの境で均衡した。「北」はかえつて団結を強くして、司教の宗教上・世俗上の權益を支持した。カトリックの防戦が可能だったのは皮肉なことにバーゼル司教の失墜だった。プロテスタント化したバーゼルから追われたグルンデルシャイム司教は北ジュラのポラントリユイに司教座を移したからである。

一時は宗教改革のために大混乱に陥つたジュラ地方をさばいていったのが一五七五年に司教に選ばれたブラレル・フォン・ヴァルテンゼー *Blarer von Waltensee* であつた。まず、反改革を進めるために、当時まだカトリックに留まっていたスイスの七つの州と同盟を結び、ドゥレモンなどジュラのたいていの町が、すでにプロテスタント化していたバーゼルと結んでいた盟約を破棄させ、ヌーヴヴィル、ムーチエなどがベルンと手を切るよう画策した。またムーチエやタヴァンヌを反改革のターゲットにしつつ、ビエンヌを取り引きの材料にして、ベルンがこの町との同盟を破棄するなら、カトリック側も手を引くとした、「ビエンヌ交換条約」*Bieler Tauschhandel* を一五九九年にベルン相手に結んだりした。これはビエンヌの怒りを買ひ、結局発効しなかつた。ビエンヌなど南部はかえつて宗教改革をつよくすすめた。

司教領ジュラ全土がプロテスタント化するのはいく止められたが、ここで南北ジュラは宗教的に二つの別な地域になつてしまつた。それだけでなく「南」は益々ベルンとの結び付きを強め、相対的に「北」との結び付きを緩くして



いった。また、近代国家的な政治・行政の技術も進んできたため、人々の国家観も中世的な曖昧なものから、意識的なものに変化をし、そのことも、ジュラの北とベルンの南との離反に拍車をかけた。けれども注意しておかねばならないのは、ジュラ全体は相変わらず神聖ローマ帝国に遠隔操作をうけるカトリック司教領の枠組みの中にあつたということである。従つてスイス同盟との国境は相変わらずビエンヌ湖にあり、ジュラには入り込んでいない。しかしジュラ南部には問題があつた。ムーチエにはベルンとの強い結び付きを通して「スイス」という意識が暗黙のうちに出来上がりつつあり、エルゲルやビエンヌ、ヌーヴヴィルはベルンとの同盟地区、モンターニュ・ド・ディエスは司教とベルンの共同支配地と、濃淡はあるものの、司教領地内で複雑な色分けがはじまっていたのである。一七世紀に入つていわば宗教改革の総決算とも言うべき（三〇）年戦争が始まるとカトリックの「北」はフランスやスウェーデンの軍隊の進攻を受け荒廃した。一方「南」はベルンなどとの同盟によつて固く守られていた。ここにも南北の体験の差が見られる。歴代の司教は度々スイスへの加盟を試みたことがあつたのだが、成功しなかつた。<sup>(20)</sup>このため、「北」はすでにカトリックとして安定したフランスに心情的に接近するようになった。ジュラ分離の底流に見え隠れするスイス／フランスの二項の対立の起源はこのあたりにもあるかも知れない。

一八世紀末になり、反ベルン感情とフランス革命の影響でこの地に一七九二年一月二七日にローラス共和国 *Republique rauracienne* が誕生する。<sup>(21)</sup>

これは北ジュラのアジヨワ地方 *Ajoie*、サン＝テュルサンヌ *St. Ursanne*、ドレモン地区、ラウフェン地区を含む共和国で、ポラントリユイが都になる。ほぼ、「北」ジュラ全域である。南ジュラはこの革命に全く関与しなかつた。「南」がベルンとの関係を持たざるを得なかつたように、「北」では、フランスとの親密さを増していたのである。単

純な図式で言えばベルン＝プロテスタント＝南ジュラに対して、フランス＝カトリック＝北ジュラという緩やかな対立がこの時期からみられた。

この新共和国は、自らの意志で、フランスに合体することを決議し、一七九三年三月二三日、モン＝テリブル Mont-Terrible という名でフランスの八四番目の県となる。革命フランスのコピーのように、政争、恐怖政治、経済的疲弊などで県内は乱れるが、革命の気運は激しく、一七九七年一〇月一七日のカンボ＝フォルミオ条約でエルゲル、ラ・ヌーヴヴィル、ビエンヌ、ムーチエ、オルヴァン、モンターニュ・ド・ディエスなど南ジュラの二二のコミューヌがさらに加入、ここに南北ジュラが合体した「ひとつの」ジュラ地方がほぼ二〇〇年ぶりに再び蘇ったのである。この時点でのジュラの「他者」はスイス＝ベルンであった。ただし無関係の。

ところがこの県はフランスの諸県に比べるとはなはだ規模が小さく、ナポレオンの執政誕生とともに、行政改革の一環として、一八〇〇年二月一七日、オー＝ラン県 Haut-Rhin に組み入れられてしまう。県庁所在地は現フランスの科尔マル Colmar。いよいよフランスに融合して行くかにみえたジュラ地方もナポレオンの失墜とともにその帰属が宙に浮いてしまうことになってしまった。バーゼルの司教の世俗権は革命中に消失してしまったからである。ジュラ人は自ら司教領というアイデンティティのひとつを喪失したわけである。このことが、後の分離運動で対立者の意識に復古主義を警戒する過剰反応を起こしはしなかっただろうか。

いずれにしても、ジュラ地方が初めて自主的に自らの帰属を考える機会が訪れたのである。しかし住人は三様の請願を提示したのだった。一つはフランスの一部に帰属する（ポラントリュイを中心とする人々）、一つは新しいカントンをつくりスイスと盟約する（「北」のカトリックの人々。また別個にビエンヌの住民）、もう一つはベルンまたは

バーゼルに融合する（エルゲルやムーチエなど「南」の住民はベルンに、ラウフェンの住民はバーゼルに）というものである。このようにすでにジュラ地方は四分五裂であった。それにしても、今日のジュラ問題の発生を未然に防ぎ得たかも知れない重大な選択がこの時点で実際にはジュラの人々の手でなされなかった、ということは、それだけの数のアイデンティティ意識があつたということである。

一八一四年三月三十一日、ベルン最高会議はヴォー国 Pays de Vaud とアルガウ州 Aargau 放棄を条件にジュラ地方を引き取るという選択に対して否定的決議をしている。経済的に問題にならない引き換え条件だったからである。

司教領という旧体制の支配形態は再興されないという見通しと、パリ会議で戦勝国がフランスに対してジュラ地方を放棄するよう決定したことの二つからジュラ帰属は宙に浮いてしまった。メッテルニヒはスイスの中枢的州であるベルンにジュラを一種の論功行賞として与える口実でフランスとの要害地帯にしようとした。しかしベルンにとつても自州がフランスとの間に長い国境を構えることは将来に不安材料を抱え込むことにもなるし、未練のあるアルガウとヴォーを放棄することにもなるので躊躇した。この点でのベルンの判断は極めて功利的である。しかし、何よりもジュラ地方は歴史的にベルンの自然な一部でなかったこと、このことに決定的な問題があつたとすべきである。のちの分離主義者の主張の強みはここに遡及できるところであつた。当事者が（ただし当事者にのみその特権があるが）異議を申し立てれば、あたかもそこに不合理が客観的に存在するかのような効果を持つのである。

一八一四年八月一三日、ベルンで論争が続けられている中に列強はベルンに対してジュラの引取を提示したりしたが、一月一日のウィーン和平総会ではベルン代表はジュラ地方のような利得の薄い所より大きな所（ヴォー）を求めた。北ジュラ代表は「南」のビエンヌと歩調を合わせ独立を希望した。この時点では南北の一部は一致していた。

會議で調整が行われたが結局、ジュラ地方をベルンに与えると言うところに落ち着いた。一八一五年一月一六日ベルンは原則においてこの裁定を受入れ、三月二〇日この内容を盛り込んだ布告<sup>(23)</sup>が出された。この時に有名なスイス永世中立の(再)確認が行われているため世界の歴史の中ではジュラ地方の行方はほとんど片隅に追いやられ人々の注意を引かなかった。

三月三十一日にこの布告はベルンの閣議にかかり諸カントンへ回された。あたかもナポレオンがエルバ島を脱出したというニュースの中であつた。四月一四日、ベルン秘密會議は最高會議に、ジュラ編入受理の方向で報告書を提出し、その結果、最高會議は賛成一三四、反対八七でジュラの命運に決着を付けた。そして、この決定が実効を持ったのは同年八月二三日のことであつた。それは同時に西暦九九九年から続いたバーゼル司教公国「ジュラ地方」という図式の崩壊の日でもあつた。ジュラ地方は一部、ヌシャテルやバーゼルに引き取られた部分があるが<sup>(24)</sup>、そのほとんどは、ジュラ人の意志もまたベルンの意向も反映しないままベルン州の一部となつたのである。

併合に際しては一月三日にベルン、ジュラそれぞれ七人の対等なメンバーによる委員会がおかれ、新体制についてさまざまな問題が討議された。この結果は一月一四日に二七条からなる『合併報告書』になつた。もつとも大きな問題は宗教であつて、プロテスタント州のベルンとカトリックの北ジュラとの融合に関するものである。政治的側面では、平等を強く打ち出している。<sup>(25)</sup>この報告書は一月二三日にベルン最高會議で承認された。それを受けてベルン州は一八一五年二月一八日ドウレモンで領地宣言を行なつたが、実際に行政的にジュラ側が旧体制から移行するのには時間がかかり、ベルンへの帰属を正式に彼らが受け入れたのは一八一八年六月一四日であつた。

ジュラ地方は五つの代官所管轄(ドウレモン、ポラントリュイ、セニュレジェ「フランシユ・モンターニユ」、ム

ーチエ、クルトウラリ）に分けられベルンから派遣された代官に「支配」される形になった。このように、二つの「国」は合併したのではなく支配・被支配の関係に入ったという認識は、そこに意味を持たそうとすれば、たちまち厳しい紛争の材料になる。ここには差異の意味づけが必要であるが、少なくともその意識以前に実感として、ジュラ人が初めて持った「異種」との接触であり、また、みずからの中に抗体を発生させ防衛姿勢に入らせる可能性がある「他者」であつた。

生活感覚として、ジュラ住民にはウィーン体制の決定に対する不満はあつた。それは移様な面から見なければならぬが、例えば実際には増税された訳ではないのだが、それにもかかわらず重税感ということがあつた。ベルンは相変わらず都市貴族 *Patriziat* 政治であり、特に北ジュラの住民にとっては今までの司教領としての緩やかな支配形態、革命フランスの一地方の新風に慣れていたため、これと大いに違つたベルンの代官支配に違和感はかなり感じていた。税を取り立てる厳格なシステムに支配者＝被支配者関係の意識を募らせた。同じ税額でも、納税と感ずるのか収奪と感ずるのかでは大変異なる。この意識は、支配者（と感ずることと、支配者に関する種々の与件を提示することとは実は同じ記号の読み替えにすぎないのだが）がドイツ語圏の人間であること、プロテスタントであること、しかもこの州では「彼ら」がマジョリティであること、ジュラにドイツ語ベルンから移住者が入り込んで、ゲルマン化が身近に感じられるようになったことなどと結び着いて、カルチャー・ギャップの意識から引き起こされる心理的抑圧感を産み出した。

ベルンとこの地方との関係は併合後一五年ほどする内に友好的とは言ひ難い様相を見せ始めた。また「南」でさえ、ウィーン体制までは、ベルンと対等の盟友関係であつたのが、支配―被支配関係に転落してしまつた、と感じ始める

住民が少しずつ出てきた。

ジュラには今までの体制上貴族はいない。一方、ベルン政治の実権は貴族にのみある（ただし貴族制度は一八三一年になくなる）。制度の違いは、それだけでも不満の種になりうる。ジュラはフランス革命の体験を持っている。その自尊心は屈辱感をさえ産み出した。

一八三〇年ころから自由主義者のストックマル Xavier Stockmar やノイハウス（ヌオース）Charles Neuhaus が七月革命の気運に乗じてさかんにジュラの権利確立のキャンペーンを始めた。パリのジャーナリズムを利用した反ベルン運動や愛郷歌、政治結社の創設などである。一八三一年一月二日ミュンジンゲンで住民の大集会が開かれたが、ストックマルはベルンに指名手配され、亡命した。しかし住民の熱にベルンは折れて、憲法制定会議が開かれ、議員一二人のうち一人のジュラ代表がここに加わることが出来た。同年七月三十一日、憲法が制定されたジュラ人の権利はこの時以来徐々に保障されていった。ストックマルも復権し一八三二年、「J. Helvétie」新聞を創刊、ジュラの権利に論陣をはった。

こうして様々な軋轢がたびたびおこった。北ジュラはとくにプロテスタント運動に対しては神経質に反応し抵抗した。一八三四年の宗教生活の合理化案（バーデン条項）に対して「北」ジュラは「カトリック万歳、カトリックもしくは死。プロテスタントに死を」という激越なスローガンで対抗、ついに、ベルンは軍隊を出しこれを鎮圧した。このとき「ベルンからの分離」という観念が初めて人々の胸に芽生えた。<sup>(26)</sup> 首謀者たち、たとえば司祭のキュッタ Cuttat など亡命した。

とは言っても、ジュラの分離に収斂するようにいかにもそれらしい年代記づくりをすればもっともらしいものが出

来るが、マイノリティであることはなにもアブリオリには正義ではないとすれば、大方の出来事の「意味」はたいした事ではなくなる。ただ、一九世紀を支配したロマン主義の数あるファクターの内の「祖国」とか「自我」は過去や現在を全く別に布置することを流行にした。

他方、リアリストのジュラの指導者達が実績を上げたのは、ジュラの産業振興であり教育活動や学校設立や出版や鉄道敷設であり政治参加や宗教上の自由の保障のための具体的政策作りであつたことを忘れてはならない。こういう要求や努力を巡つてのさまざまなトラブルは、一九世紀の初頭から産業革命期を経て第一次大戦までのヨーロッパのコンテクストでみればそれほど目立つことではないといえる。そしてそれらのほとんどが獲得されたのである。自治や分離についての意見があつたにしても、それはジュラの山奥に道路を作りトンネルを穿つ工事というような実生活のレベルとの比重をかんがえれば、ほとんどたんに観念でしかない。観念が一番尖鋭化しやすいもののひとつは宗教で、ジュラ対ベルンの対立の宗教に還元された対立は一気にさまざまな「差異」のアイデアを産み出していく。

例の一八七〇年七月一八日のヴァチカンの「教皇無謬宣言」に端を発する「文化闘争」Kulturkampfもそのひとつであろう。この闘争はカトリックのジュラを弾圧する結果となつた。その時までにジュラはベルン軍の治安部隊に六回も制圧を受けていたからその延長で見たこの図式もそこだけに注目すれば、ジュラの被抑圧者としての姿を描くことが出来る。けれど、「文化闘争」はそもそもプロシアでの運動であり、これがスイス全土に波及し、爪あとはジュラ以外の至る所にも残つたのである。さらにこれは改憲派と反改憲派の対立でもあり、かつ信仰に政治が口を出したという一面の裏のもう一面は政教分離の近代的大キャンペーンでもあつたことを考えれば、たとえば善玉・悪玉式にジュラ地方に一方的に必ずしも加担はできない。しかし、聖職者任命に住民投票を持ち込むことの可否を問う投票

で「南」と「北」は決定的なちがいを示してしまったことは認認しておいてよい。つまりカトリックとプロテスタントの溝である。

二〇世紀になってもいくつかのジュラ分離につながる動きはあげることができる。たとえば、一九一三年、ジュラの Eloy 村と Scheute 村の名前を、ここに移植してきたベルン人の要望でドイツ語名にすることをベルンの執行議会が決定した時の反対運動や一九一五年、ジュラのベルン併合百周年記念行事を一部住民が阻止、妨害したことなど。それらの多くはすでにシンボル化した「郷土ジュラ」被抑圧者、ベルン「抑圧者」という記号による自分たちの属する体系の読み直しであつて、しかもこれはジュラ問題という掴み方をしたとき、論者にも滑り込んでいる記号体系でもある。

ジュラ地方ではスイス法を受け付けなかった。ほとんど一世紀にわたつて、ナポレオン法典（民法、刑法、商法）が施行され、この地にスイス法がひかれたのは一九一二年のことであつた。これは逆に言えば、ベルン側が配慮をしてきた証でもある。ベルンは荷厄介な経済後進地帯のジュラを抱え込んで手厚い経済保護政策も行つてきた。ベルンの九閣僚の内二名はジュラ出身者になつていたし、全州議會議員（上院議員にあたり、各州定員二名）も一名はジュラから出ることが暗黙のうちに認められていた。しかし、ジュラの住民サイドからは、それはマイノリティに対して当然のことであり、恩きせがましく喧伝すべきことではない、とかえつて反発の世論を喚起する材料にすらなつた。さらに、平等という観点からは、行政の担当者、とくに、ベルン州議會議員や官僚の中間層は実質的にはほとんどベルン人に占められていると主張も出来た。しかし、この主張は人口比の無視と、そのほかにつぎの実際の職業選択のビハイヴィアを考慮せずになされているものだとも言えよう。<sup>(27)</sup>すなわち、ジュラ人も上層部や中枢はそれなりの数い



た。ベルンで働いて、カルチュア・ギャップに耐えるに値する名譽、誇り、報酬の見返りがあるからである。しかし中間以下になると、あえてドイツ語圏で働く意義がうすいとかんじる者が多い。書類の九〇〜九五<sup>28</sup>はドイツ語で作成されているし、加えて、日常生活のドイツ語はすべて、「ゲーテのドイツ語」とは架け離れた方言である。しかも、スイス人は「中央幻想」概念を一般には持ち合わせないから、郷里を離れてまで、求職するに値しない仕事は求めない、という一般的性向も無視できないであろう。おそらくこのことは、賃金の格差が持つ求心力より、土地への密着の引力が強い事にも起因しているのであろう。ここに、しかし、ジュラ＝ベルンの枠内ではジュラ人にある種の潜在的不満、すなわち、求心力と引力とのアンビヴァレントな感情を持つことを余儀なくされるという不満、を蓄積させていったであろう。このことは、一般化して言えば、分離・独立指向の要因の一つに、深層心理的にひそむこの「アンビヴァレント」な感情の廃棄願望というものがある、ということである。廃棄は、しかし、必然的に実際的不利益を伴うはずで、その明らかな帰結を隠蔽するため、分離・独立というイデオロギーが常に輝かしい神話創出で補強されるのである。

いずれにしてもある体系が創出しつつあった。その総括として「ウィーン会議決定は、ジュラの自治の歴史に対する冒瀆とスイス諸州の民族的自決権への侵害という二つの誤りを我々に押し付けた」(ポラントリユ出身の議員、グザヴィエ・ジョバン Xavier Jobin の国会演説)という形で表明されたのは一九一九年のことであつた。こう表明することとジュラ分離の理念の形成とはもう一步の差でしかない。

大戦後の一九二〇年頃からジュラとベルンの経済力の差が問題になり始めた。とくに一九三〇年代の不況期、私たちの経済状態の悪さの原因の説明を求めるようになった。<sup>29</sup>

理不尽な現状という説明体系が人々の頭のなかで作られていく。さらに、ナチス台頭を反ゲルマンから反ベルン感情に結び付けるとか親フランス（ジュラ地方は歴史的経緯からも地理的状況からもとともフランスに傾いている）をスイス・ロマンド（フランス語圏スイス）との連帯意識へ近づけフランス語の擁護とか言うジュラ愛郷のシンボルがいくつか補強される。おそらく、このあたりからジュラ分離達成までの期間は、この種の体系の補強と補強された体系の自己増殖活動の昂揚期と言えよう。<sup>(30)</sup>

すでにジュラには《ジュラの利益擁護協会》Association pour la défense des intérêts du Jura（プロジュラ）Pro Jura、《ジュラ振興会》Société Jurasienne d'émulationなどの団体が出来ていたが、これらの組織は一九四〇年代に入ると、ベルン政府相手に自治の問題を提示するようになっていった。

このようにジュラの分離意識は年々増幅されて行ったが、ベルン州憲法では領土保全の権利と義務がある以上、分離を可能にすることは不可能である。憲法改正が必要である。しかしマイノリティが分離を請求するという大変厄介な問題に、関係のないマジョリティがつきあってくれるだろうか。多数決原理の民主的方法はマイノリティの要求というようなケースでは最も不利に働くシステムだということに人々は気が付きはじめたのである。多数決の原理を維持しつつ少数が勝利する方法はあるのか。州の領土の自己解体の決定をする権利が誰にあるのかというパラドックスにも似た問題を克服出来るのか。

第二次世界大戦後の一九四七年九月、一つの「事件」が起こった（言え換えれば、事件化する一部の人々にあらたな説明体系を与えた）。ジュラ問題が緊張をはらみだしたさなかにジュラ出身のジョルジュ・メックリ Georges Moeki 議員が、「ドイツ語が喋れない」という理由で土木・交通担当の州政府大臣の座を拒否されたのである。そ

れは、フィクションに限りなく近いよく出来た断である。「フランス語しか喋れない人に交通大臣の職を任せるわけにはいかない」と演説したのはインターラーケンの獣医ハンス・チュミ Hans Tschumi (後に連邦議員となる)であるが、コンテクストがある。それはジュラ地方の鉄道経営が財政的に逼迫してその打開に、ジュラ出身だからという理由でメックリ氏に仕事を任せてよいのか、それほど簡単な問題ではないのだ、フランス語だけでベルンの政財界関係者とうやうやって折衝をし赤字補填をするのだというものであった。そして九月九日にこの大臣職にはドイツ語圏の新人代議士が任命された。ジュラ人はこれにまちがいに激した。早速二千人集会をドゥレモンで行い、ムーチエに《ジュラ人の権利擁護のための委員会》(通称《ムーチエ委員会》)を発足(一九四八年)、分離の気運は高まっていた。ロジェ・シャフテル Roger Schaffter やロラン・ベグラン Roland Beguelin<sup>(3)</sup>などの指導者も出現し、明確な運動体として動き出したのである。

《ムーチエ委員会》は一九四八年四月三〇日「ベルン州政府に提出するジュラ問題」というタイトルの冊子を発行。二二項目にわたる政治、経済、文化に関する問題点をベルンにつき付けた。結論部分で「州憲法は、ベルン州においては至高の権利はベルンの人々と同様ジュラの人々にもあること、ならびにそこを基盤とするすべての帰結を認めること。ジュラの権利擁護のためには連邦的でかつ二部院制(ベルン議会とジュラ議会)を設けること」と述べている。しかしこれらの提言全体はベルン特別審議会で否決され、一九四八年七月九日にその旨伝えられた。理由は一言で言えば、ジュラ人の権利は現状で十分守られているというものである。

ベルン州の統一の観点に立てば、州民のマジョリティを逆差別したり分断したりしないことこそ正義だという理論は十分成り立つ。ただし、よって立つ価値の体系が異なっているときにはジュラの論理もベルンの論理も普遍とはな

り得ない。とくにマイノリティなどという、自己の帰属している集団の構成員の数の少なさが「正義」にともすればなるような「系」はそうでない人々にとつては、いいがかりでありとまどい以外のなにものでもない。もうひとつは、そのマイノリティ集団のなかのマイノリティ（反分離主義をとるひと）を巻き込まないような要求の受入れ方があるのかどうか。民主主義の多数決原理をグループ間に適応するときにおこるアイデンティティのまだら模様をいかに平準化するかという、基本的なパラドックスをどう打ち破るのか、という問題もあいかわらず解けていない。

それでも、《ムーチエ委員会》の要求のうちいくつかは、一九五〇年一月二十九日の憲法改正で受けとめられている。しかしジュラは不満であつた。

《ムーチエ委員会》とはほぼ同じ頃（一九四七年一月三〇日）に発足した《ジュラ連合》*Rassemblement jurasien* (RJ) は、当初は目立たない運動体であつたが、この新憲法問題がおこり、にわかに活動を始めた。目標はダイレクトに「ベルンからの分離によつて自治国家を創設すること」<sup>(33)</sup>である。ジュラの民衆はスイス連邦誕生により昔からこの土地に住んでいるのだ、というおなじみのセンチメントが前面に出きくる。これは後に六（「文学・証言」）で扱うテーマともなる。

その一方で「分離」ではなく「自治」にとどめる穏健派や「反分離」運動もはじまつた。一九五二年に結成された《ジュラ愛郷同盟》*Union des patriotes jurassiens* (UPJ) がそれであつた。<sup>(34)</sup>

ベルンだけではなく身内と思つていたジュラ人からも激しい抵抗がでて来た。そのことは、いつそう「ジュラ」というシーニュを鮮明にすることはあつても、決して排除すべきものではなかつたはずだが、もちろん運動家にはそのことは見えにくくなっている。〈分離〉というアイデアで人々は未だ存在しない分離を語りそれは運動につながり、

運動は「分離」の表徴をさらに豊かにしていく。たとえば、アイデンティティである。(後に、七「アイデンティティの円環」でかんがえる)。

一九六〇年代<sup>(35)</sup>になって運動は激しさを増していった。若者の中に、《「牡山羊」Beliers」というグループがつくられ、ベルンに対して、しばしば激しい示威運動や放火、投石を行った。また《「ジュラ解放戦線」Front de libération jurassien (FLJ)》という地下組織が結成されたりもした。テロリズム肯定のこの過激派は大衆的基盤を持ち得ず、首謀者三人が一九六四年に逮捕されて消えた。その前、一九五九年、RJはベルン政府に対して住民発議(イニシアティブ)<sup>(36)</sup> initiativeを提示していた。ジュラ自治権のための住民投票請求である。しかしこの投票結果は完全敗北であった。

結果は特別自治権を是とするもの二三、一三〇票、否とするもの八〇、一四一票。しかもジュラ地方内でも是が一五、一五九票で否の一六、三五五票を下回った。《地区》で見ると、ポラントリュイ六四、七四票、ドウレモン七〇・五八票、フランシュ・モンターニュ七四・七八票でいずれも是が勝り、ラ・ヌーヴヴィル三三・九二票、クルトゥラリ二三・四一票、ムーチエ三三・七五票、ラウフェン二六・三〇票では三分の一やっとであった。この「南」と「北」の格差は結局一五年後の結末を予告していた。同趣旨の住民投票は一九六二年五月にも行われたが、結果は同じであった。

その後ベルン政府がやや方策を変え、一九六五年一月二日、ジュラに相対的自治権を与える案を提示したが、RJはこの内容を不十分として拒否した。

この間、フランスのこの手の運動家との連帯による外圧づくりや文化人のアンガー・ジュマンによる世論喚起なども

雰囲気作りの一助になったが、要するにこの形式の投票は何度繰り返してもともマイノリティであることが原因ではじまった運動をマジョリティ原理（多数決）で解こうとするのは一種のパズルではないかと一部の人々は苛立ち始める。

実は、困惑はベルンの方にはるかに大きかったと見るべきだ。ここまでみて来て我々が抱く感想は次のようなものであろう。ジュラのアイデンティティのためにベルンが自らのアイデンティティを切り崩すわけにはいかないし、合法的な最善の手立てをすでに尽くしている。過去のいきさつから譲れるものはすべて譲っているではないか。なにより民主主義の原理から言ってもそれは「ベルン側」が解答者にならねばならない筋合いはない。ベルンは専制君主でないだけその分だけ解決から遠い所に置かれている。こうなるとベルンの本音は、究極のところ、解決の持つともラディカルな意味、すなわち、ジュラ問題からの解放と読んだ方がよいのではないのか。

「本当に」ジュラが求めているものを問いかえすことはもうやめたほうがよい。この際パズルを解いてしまうことが急務なのだ。たとえそれがニセの解決でも。

ジュラのあちこちでおこる「いわれのない」反ベルン（この時点では彼らもベルン州人であった事を確認しておく必要がある。つまり、反ベルンというのは、民主的な枠組みの中では、自己に向けた刃でもある）。この内なる反乱を、ベルン州は、自己のうちに分離したい「部分」が存在することの証と認め、その明確度を確かめ、一定のルールのもとに分離を可能にする道を開くことを考え始めた。それは我々の目にはむしろこれは「ベルン解放」のための処方箋に見える。いわば自己解体を、解体する自己が自己決定するという奇妙な実験である。

マイノリティと思われる者を大括りに事前的に抽出し、関係者と部外者を区別した上で、分離についての投票をさ

せようと云うものである。マジオリティからマイノリティを救う（厄介払いする）方法、これが論理的に得られた最善の帰結である。いかにも関係者の意志を問うというかたちをとりながら、平行的に関係者を識別し、彼らを解放するのだから。

多数決の原理に則ったデモクラシーが建前上、前提としない反デモクラシーの採用をあえて行ってみようというのである。ベルンは《賢人委員会》を設立、元連邦議会議員のマックス・プチピエール Max Petupierre、ヴァーレン Wahlen と国民議会議員のプロガー Broger、グラバー Grabar が委員となりジュラ問題の解決に乗り出た。その結論は一九六九年五月一三日付けの「解決への提言」という文書にまとめられた。これは多段階式の〈自決〉方式を提案したもので、そのためにはベルン憲法に特別条項を加えねばならない。多数決の原理を形式的に守るため実質的には破るというパラドックスがそこにあることを住民が納得することから始めなくてはならないからである。

追加条項の第一条は条項全体の目的を「ジュラ地方」（一九五〇年のベルン憲法に規定されている）の全体もしくは一部の自決を確定するためのものとし、第二条はジュラの七〈地区〉に新州創設にかかわる住民投票を行う可能性をさぐるというものである。この部分がまず大変な「発明」である。ジュラが「身内」で決着をつけるような作為をあえてしている。つまり、この段階でもうベルンの問題ではないという意志表示でもあるのだ。第三条はジュラ全体が多数決で、ある方向決定をした場合にも、この中の〈地区〉はこれに対してさらに別の意志表示を行いうるようにならなければならない。つまり〈地区〉段階で、多数決から免除されるよう事前に配慮されているのである。第四条は、〈地区〉決定に対してそこに属するコミュニティが反対方向の決議をなしうるよう保障すること、となっている。もう一段多数決から救済されるよう配慮がなされているのである。ただし、この条項は、その結果コミュニティ

が飛び地にならない位置にある限り、という留保がついている。第五条はラウフェンについての特別条項で、もしこの〈地区〉の住民が分離反対の意志表示をした場合、有権者の五分の一の請求で二年以内に住民投票を行って、隣接するいずれかのカントンに帰属する可能性を開いておく、というものである。ラウフェンは図4で明らかになようにもしベルン残留を選択するとベルン州からは飛び地になってしまう。隣接する州とは、バーゼル州とゾロトゥルン州である。この条項もある選択を見越した一元的多数決原理に反する恣意的で、しかし最も現実的な規定である。その他この《ベルン憲法追加条項》は数多くの広いめくばりのきいた項目を注意深く設定している。<sup>(37)</sup>これは憲法条文と言うよりむしろ、ジュラ新州を必要とあらば、確実に誕生させるための空間的にも時間的にも綿密に練られたシナリオというべきである。

ベルン憲法追加条項承認のための住民投票は一九七〇年三月一日におこなわれた。結果は、承認するもの九〇、三五八票、しないもの一四、一三三票で、とくにジュラ地方では二〇、四二一対二、二五九だった。いよいよ決着をつけるところから逃げられない。そこで今まで以上に反分離派と無関心派が興奮し出した。ゼロ度の地平に他者が「意味」を付与してきたのに不本意でも対抗しなくてはならないのだ。「有徴」というフィクションの舞台に無理矢理引きずり出されたのだ。その上、基本原理は相変わらず多数決である。今や、もしかすると、自分の村で、一票の差でも、自分の意志に反して分離する事を強いられる状況が出てきた。

《ベルン憲法追加条項》の第二条二項は、ジュラ地方の住民の内五千人以上の請求またはベルン政府執行議会の決定で第一段の住民投票に入ることを定めていたが、実際には一九七三年九月九日のR Jの請求に答える形で、ベルン政府がこの投票実施を決定した。投票日は一九七四年六月二三日となった。



設問は「あなたは新しい州を設立したいですか」。これに「諾」または「否」で答える。対象になる住民はドゥレモン、フランシュ＝モンターニュ、ポラントリュイ、ムーチエ、クルトゥラリ、ラ・ヌーヴヴィル、ラウフェンの七〈地区〉に住む有権者のみである。投票日は朝から豪雨だったが、スイスでは稀に見る極めて高い投票率であった(八八・六七割)。その結果、新州設立に賛成する票三六、八〇二、反対票三四、〇五七。過半数点を〇・六八割オーバーしただけの薄氷を踏む分離決定だった。有効投票数(無効投票または白票は一、七五二票)のみで見ても一・九割の超過にすぎない。しかも、〈地区〉別に見ると、分離賛成が過半数を占めたのはドゥレモン(七六・二割)、フランシュ＝モンターニュ(七五・七五割)、ポラントリュイ(六五・六八割)の三〈地区〉のみで一九五九年の投票と同じ結果になった。残りの四〈地区〉では反対が賛成を上回った。すなわち、クルトゥラリ二一・八四割、ラウフェン二五・五五割、ムーチエ四二・〇七割、ラ・ヌーヴヴィル三三・八七割の賛成票しか集められなかった。

この投票内容を少し細かく見よう。ドゥレモン地区の中では二三コミュニティの内、三コミュニティで「否」が「諾」を上回っている(Ederswiler 五二対三五、Robéveiler 一五対八、Roggenbourg 七七対二四)。またポラントリュイ地区でも三四コミュニティの内、三コミュニティで逆転が起こっている(Asue 一八〇対六八、Boutol 二四九の均衡、Roche-d'or 一七対九)。フランシュ＝モンターニュ地区だけは一〇コミュニティすべてで「諾」が優勢を占めた。一方、「否」が多数となった四〈地区〉でも接戦〈地区〉ムーチエでは三三コミュニティの内、九つが「諾」を選んでいて(Chatillon, Corban, Courchapoix, Courrendlin, Les Genevez, Lajoux, Mervelier, Rossemaison, Vellerat)。こうやってほぼ予想通りまだら模様の諾否が出た。それはまたまだら模様のアイデンティティということになる。投票率でも分離に傾いた〈地区〉の方が高い。最も投票率の高かったコミュニティはムーチエ地区のヴェルラ Vellerat で

一〇〇割、逆に最も低かったのが同じ〈地区〉のラ・シュールト村で六七・七四割だった。比較的低かった所にドウレモン地区 Ederswiler (七七・四一<sup>割</sup>) や Roggenbourg (七二・四一<sup>割</sup>) があつた。それらの村の特性についてはあとで触れる。

有権者の九割近く七七、六一一人が一四五箇所の投票所へ足を運び、開票は午後二時に始まり五時に集計結果がでた。「ジュラで一番長い日」<sup>38</sup>は分離という結末で幕を閉じた。それは「ジュラ劇」の一幕目の終了であつた。

しかし、七つの〈地区〉のうち四つでこの結果に不満を表明する住民が過半数を占め、翌年の三月一六日にまずムーチエ、クルトゥラリ、ラ・ヌーヴヴィル地区で有権者二〇割の請求により第二段目の住民投票が実施された。この投票ではとくに先回接戦をしたムーチエ地区で加熱ぎみの戦が繰り広げられた。というのは、もし地区の票が分離に賛成と出ると、コミュニヌ票いかに係わらず、ジュラに組み入れられる部分と、旧ベルン並びに早くベルンを決定したクルトゥラリに接する部分のコミュニヌのように三度目の住民投票が待っているコミュニヌとの二種が出現することになったからである。このため投票率が九六・〇二割にまで上がった。しかし、その結果は三地区ともベルンに残留という、ジュラ全体とは逆の結論を出した。それは多数決原理からの救済システムのおかげである。しかし、分離主義者は、これこそベルンの仕組んだジュラ分断のあくどい策略だと激しく非難した。<sup>39</sup>

ムーチエ地区ではベルン残留を諾とするもの九、九四七票、否とするもの七、七四〇票、クルトゥラリ一〇、八〇二対三、二六八、ラ・ヌーヴヴィル一、九二七対九九七では前回投票と同じ結果を得た。異なつた点は、全体の投票率の高さ(どの〈地区〉も九〇割以上)。もちろんムーチエ地区の九つのコミュニヌでは、先回同様ジュラ分離を支持した。コミュニヌとしてのムーチエ市では前回、分離賛成二、一二四、反対二、一九四、無効・白票一二四で

あったが今回もそれぞれ二、二三八票、二、五二四票、二八票だった。前回の分離派四七・八一割に対して今回は四六・七二割で微減。この投票は癒し難い分断をムーチエ市に残し、半年後の最終投票へと熾烈な戦いを展開することになる。

三段目の投票が行われた。憲法追加条項の第四条の規定により、ジュラ州に確定した〈地区〉とベルン州との境界に位置するコミュニヌに再々選択のチャンスが与えられ、ムーチエ地区の二コミュヌとドゥレモン地区の二コミュヌは一九七五年九月七日、一日、一〇月一九日と村ごとの投票をした。その結果、ムーチエ地区の Chatillon, Corban, Courchapoix, Courrendin, Les Genevez, Lajoux, Mervelier, Rosemaison がジュラ州に滑り込み、ドゥレモン地区の Robéveilier と Roggenbourg がジュラ州から離脱した。ムーチエ地区の Granval, Moutier, Perrefitte, La Scheulte の四コミュヌは分離を求めたが果たさなかった。また、州境にないためこの「返り咲き」が許されなかったコミュヌがムーチエ地区に一つ、ドゥレモン地区に一つ、ポラントリュイ地区に三つあった。この内の初めの二コミュヌは後に問題を起こす。

一九七五年九月七日の夜、ムーチエ市で暴動が起こった。この日に実施された投票で三度目の挑戦に二、四五〇対二、一五一票で破れた分離派が反分離派と暴力的な衝突をしたのである。ベルン警察が介入せざるを得なくなり、この騒乱は明け方まで続いた。ジュラ問題がアイデンティティの問題である以上、多数決の原理はどれだけ細かい配慮をしても住民を救えない。集団のアイデンティティは個の自我との複雑で多元的な相互関係だから。この問題はのちに考察する。

もう一つの〈地区〉のラウフェンでは、第二段投票請求にむけて三三一二人の署名を集め、一九七五年九月一日、

敗者復活戦投票で行われた。その結果、反ジュラを打ち出した。四二一六対二六四票の圧倒的ベルン支持であった。ただこの地区のみ前述のとおり特殊事情があり（ドイツ語圏であること、バーゼルに近いこと）、当初から、分離はしないだろうと見られていたが、必ずしも、親ベルンではなく、この際、バーゼル（バーゼル・シュタット州かバーゼル・ラント州）、あるいは同じく隣接するゾロトゥルン州に帰属替えをする可能性も持たされていた。その期限はベルン憲法追加条項第五条により、一九七七年一月一九日までに住民発議（イニシアティヴ）をするという留保つきであった。しかし、結果として、旧来のままベルン州に残っている。しかし最近バーゼルへの帰属変えの問題が再燃<sup>(40)</sup>している。

最終結果として、北ジュラの三つの〈地区〉マイナスニコミューヌとムーチエ地区の八つのニコミューヌがベルン州からの分離を選んだ。

この時点で、人口六七、二六一人、面積八三七・四km<sup>2</sup>の新しい州の規模が確定したのである。プログラムに沿って、すぐに立憲会議が設立されジュラ州誕生への歩みを踏み出した。<sup>(41)</sup>新州の体制の詳しい経緯と内容が全国に報告されたのは一九七七年一月一六日だった。<sup>(42)</sup>

最後の手続きは、この州をスイス連邦の一員として認めるかどうかの全国投票である。これほどの騒がしかった問題に、今まで国はほとんどかわりを持たなかったのは、いかにスイスが地方自治、自決の精神に支えられた制度を堅持しているかの証であろう。今回は、スイス連邦の根幹にかかわる憲法の改正に関係するから全国民が投票に参加する。

連邦憲法の第一条はスイス連邦のメンバー名を定めている。それと関連して第八〇条は全州議会議員の定数を各州

二名の計四四名としている。州が増加すれば二名増員となる。この二つの条項の改正の是非を国民に問うものである。国民投票は一九七八年九月二四日に行われた。結果は改正を是とするもの一、三〇九、七二二票、否とするもの二八一、九一七票。八二・三割の同意を得てジュラ州は連邦の一員に迎えられた。その結果、ジュラ州は一九七九年一月一日をもって発足することに決定した。

しかしこの投票内容をすこし詳しく眺めると、やはり「南」と「北」の溝がいかに深かったかということがよくわかる。

まずその前に、全体の様子をざっと見よう。ジュラ新州連邦加盟に反対する票が上回った州はなかったが、二五州（半州を含む）中、ジュラに最も消極的だったのがベルンだったことはやはり問題の複雑さを見せている。全国平均で反対票は一七・七割であったのに対してベルン州は三〇・四割（八二、〇五〇票）あった。ジュラ地方の票を差し引いて見ると、その反対票は三一・二七割に上がり、ベルン人がジュラ分離（あるいは分離問題）にかなり反感を持っている事がわかる。しかし、それは元からあったものだろうか。ジュラ問題にたいする反感だとすると、敵対はジュラ分離運動家が種を蒔いたものだ。ジュラ＝ベルン関係をアイデンティティという表徴に置き換えた時に全体の布置は変わったのだ。

では逆に積極的に応援をしたのはどの州だったのか。九〇割以上の賛成票を集めたのがフリブル州（九〇・一割）、ティチーノ州（九五・一割）、ヴァレー州（九一・九割）、ジュネーヴ州（九一・二割）であった。いずれも非ドイツ語圏である。同じフランス語圏でもヴォー州は八八・六割、ヌシャテル州は八四・七割で、全国平均の八二・三割より高いとはいえ、それほど高率でない。一方ドイツ語圏でありながらルツェルン州（八八・一割）、オプヴァ

ルデン州（八九・三割）、ニートヴァルデン州（八六・五割）、ツーク州（八七・一割）、アッペンツェル・インナーローデン州（八七・〇割）は比較的高い支持を示した。

この理由説明は簡単である。非ドイツ語圏が比較的高いのはジュラ問題が言語戦争だという「通説」によるからで、一方、ドイツ語圏の幾つかの州が高い支持を示したのは、これらがカトリックの優勢な州だから、ジュラ問題は宗教戦争なのだというもうひとつの「通説」に支えられたものである。そして、ここで見る限り、言語より宗教がやや上位ファクターであったことも明白である。たとえば、同じフランス語圏でもカトリックの諸州とプロテスタント州のヌシャテルの反応の差がそれを説明している。またドイツ語圏の同じ州でもジュラを高率で支持したアッペンツェル・インナーローデン州と対象的にプロテスタントのアッペンツェル・アウサーローデン州は反対票二六・九割の冷たい反応を示した。それはまさに「北」と「南」の分断のある「通説」部分を全国規模に拡大してみせてくれるものだ。あるいはカトリックのヴァレー州やフリブル州がイタリア語圏のティチーノ州より賛成票が低かったのはこれらが言語国境をもつ州のためドイツ語圏を半分抱えていることの理由をあげることができる。しかし、ジュラ問題がそのような単純な二項対立ではなかったことはすでに見てきたとおりである。とは言っても、ジュラ問題にそれらとは別の実体的な大義があったというわけでもない。創生物語はその時間的空間的総体がひとつの既に理由＝結果であった。

ベルン州内をみよう。州内平均投票率は四四割と当事者州としてはさして高くない。ただ、「北」では八六割と圧倒的な高さであった。これ以外の〈地区〉では低い。「北」では是とする票が否とする票の約一〇倍であったのに対して「南」のクルトゥアリ地区では否の方が多かったのである（四、四九一対五、九〇〇）ムーチエでもからくも是

が否を上回る(六、〇九三対六、〇一五)程度だった。コミュニヌ単位でもクルトゥラリ地区の一七のコミュニヌの内一が、ムーチエ地区の二六の内二〇がジュラ新州阻止に票を投じた。「北」への最後の抵抗、あるいは身分の離脱制止だろう。一方ラウフェンとラ・ヌーヴヴィルはそれぞれ八三・三二<sup>票</sup>と六五・三七<sup>票</sup>の支持を集め、この「地区」がジュラ問題からやや距離をおいたことがわかる。当初から分離側にまわる可能性が薄かったからである。それはこの両「地区」の今回の投票率の低さからもわかる(それぞれ五五・六〇<sup>票</sup>と六四・一〇<sup>票</sup>)。

この部分で見る限りジュラ問題への取り組みには三種の色分けが出来る。分離当事者と反分離当事者とやや局外者ある者にとつてのアイデンティティは他の者にとつては何ものでもないか、あるいは自分達への敵対者となるという三分法。わたしたちは、「民族」のアイデンティティの問題はせんじつめれば個のレベルの自我(それは「民族」との円環を持つが)の確認の延長線上にしかないのではないかとかんがえるものだが、このような、どうやつても客観化できない関係の記号でしかないものがある日、有意味に転ずるためにはかなり激しい差異化の発見・発明がそこに必要である。言い換えれば、アイデンティティが創出されしかも補強されなければならない。

ところで、ジュラ問題はかたずいていない。未解決の問題として、ベルンに残ったムーチエに引きずられて、分離への圧倒的賛成を投じたにもかかわらず、ベルン州に残らざるを得なくなったヴェルラ Vellerat 村と、ちょうど逆にラウフェンに帰属を希望したのにジュラ州に組み入れられたエーデルスヴィラー Ederswiler 村の問題がある。

この二つの村はベルン州憲法追加条項第四条に該当していなかったため帰属選択権がなかった。そういうコミュニヌはポラントリユイ地区にも三つあったが、この両村が特に問題になるのは、現在、州境に位置してしまっているからである。ヴェルラは分離派で、第二段目の投票でジュラ支持を三二票対七票で決めた(棄権二)。しかしこの村の

北にはドウレモン地区に接してクーランドラン Courtendin 村があった。このクーランドラン村がジュラ編入権を行使して、結果としてヴェルラ村がせり上がって州境になったのである。エーデルスヴィラーはベルン支持で（四二対三五、棄権二三）、村の東側にラウフェン地区に接して Roggenbourg 村があり、ここがラウフェンに編入してしまった。結果、州境にとり残された。このやや滑稽で気の毒な出来事は、ある意味で憲法追加条項の盲点だった。飛び地を避ける配慮がかえって問題を残したのである。恐らくエーデルスヴィラー村の住民はこのことに早くから気づいていたのだらう。有権者一〇〇人の内二三の棄権をみた。一方、ヴェルラははじめから接戦をするムーチエ地区にあったから逆に一〇〇割のこれまた極端に高い投票率を示した。一票が命運を左右し得たからである。

現在もこの二村はそれぞれの帰属をめぐって戦い続けている。ジュラ州はヴェルラ村をいつでも受け入れる体制だが実はその法的根拠になっている同州憲法一三八条（一九七四年六月二三日の住民投票に係わった全地区は連邦と関係州の法規に照らして合法的に分離してくるならいつでも受け入れる可能性を保持するものである）が連邦サイドから各州の領土保全の権利にかかわる連邦憲法違反だとされて、いまだに決着がつかないのである。ベルン州は再びあの気の遠くなるような州憲法追加条項作成から始まるすべての作業でもない限りヴェルラ放出、エーデルスヴィラー編入の法的根拠を見い出せないとしている。作業をめんどくさがっているのではない。ヴェルラ村のジュラ支持者全員三五名の署名を集めても到底憲法の追加条項をあらたにつくらせるための発議（イニシアティヴ）権は得られない。もちろん何十年の「戦い」を経てベルンを選び取ったベルン州内の他村がここを離れたというヴェルラ村のために署名集めをすることはありえない。一方、エーデルスヴィラー村についてはとくにジュラ州が難色を示している。歴史的にこの村はドウレモンの領地で、完全なフランス語の村だったのが、一八世紀中ごろからドイツ語



民に「占領」されてきたのだという。

問題はまだある。さきにふれたポラントリュイ地区内の三つのコミュニヌである。反ジュラを選びながらジュラ州に組入れられたのである。はじめから地理的にベルン州(あるいはそうなる可能性のある州)との境界を持たないポラントリュイでは、〈地区〉の多数決がすでに絶対であつて、コミュニヌには選択権がなかった。またポラントリュイ地区にはジュラ州を選んだものの、僅差で選択に到ったコミュニヌが七つあつた(たとえばミエクール村 Mécourt° 一三六対一二三)。

ポラントリュイ地区についていえば、ドゥレモン地区との格差はかなり大きい。住民のアイデンティティ物語の濃度の格差である。ポラントリュイ市はもととジュラの文化的、政治的中心だつた。司教座もありフランスとの併合時はモン・テリブル県の首府にもなつたことがある。しかし、新州が発足すれば交通の要衝にもあり人口も多いドゥレモン市(ポラントリュイ七、〇三九人に対して一一、六八二人)に州都が行くのはあきらかで、これまでの心理的優越性はベルン州内であればこそその誇りでなかつたか。アイデンティティが差異の意味付けから生じるとすればなおのことである。ドゥレモンのようなもともとアイデンティティの薄いところにこそ作為が強く増幅された可能性がある。

ジュラ分離のアイデンティティ確立も、自らが求めたとはいえ、結局、政治・行政的解決に墮落した。しかし、上でも論じたように、追求目的を具体化せざるを得ない以上、疑似解決でもして終結宣言をしなければ永久革命になるだろう。

ジュラ問題はジュラ地図のなかの様々な記号の編成替えだつた。一点を移動するだけで波及的に新たな問題が発生

していく。

たとえば「南」の「アイルランド化」。すなわち、「南」に、とくにムーチエ地区にジュラ問題をミクロ化し濃縮し尖鋭化した。少なくとも顕在化したことはあきらかだ。ベルン州人口の六・八割というデータから以前にもまして過激なマイノリティ物語を作る分離主義者がいる<sup>(44)</sup>。

北ジュラにとっては、当初の予定の半分の地域（約五五割）、半分の人口（約四八割）で分離せざるを得なくなつたことは、様々な不利な結果を導いている。

しかし問題は新たなマイノリティである。ジュラ州内では、住民の中で非フランス語人口は九、一三三人（一九八〇年現在。以下同じ）で一四・〇五割となった。非カトリック人口は一〇、六七三人で一六・四二割の少数派になった。マイノリティの逆転である。ジュラ州憲法はその第三条に「フランス語はジュラ共和国・州の国語で公用語である」と定めている。ベルン州のドイツ語優位の言語慣用に抵抗し続けてきたジュラ人はベルン人より寛容なのだろうか（ベルンの憲法は独仏語を州の国語に定めていた）。典型的なエスノセントリズム発生のメカニズムがここに見られないか。宗教についてはジュラ憲法第一三〇条にカトリック・プロテスタントの同権をうたつていて問題はない。しかしベルン時代にも不満の種にはなっていないのである。歴史上の出来事にこだわるなら別だが。

むしろこの問題は反分離主義者にこそ意味を持っていたのではないか。カトリックの支配をおそれる動きはしばしば見られた。宗教改革の中心の一つであったスイスでも最近カトリックは急速に信者数を増やしつづ<sup>(45)</sup>つある。イタリア人労働者などを加えた数では既にプロテスタント四四・三割に対して四七・九割と逆転している。この場合プロテスタントは潜在意識の中で防衛的なるだろう。スイスで最もプロテスタントが強いのはベルンであつてみれば「南」が

ベルンによりかかるのは、もし宗教戦争とみるなら、当然のなりゆきだったかもしれない。しかし、ここでも同じ事が言える。「南」にもカトリックはいるのである（ムーチエ地区三九割、クルトウラリ二四割、ラ・ヌーヴヴィル一五割、ラウフェン八七割）。この人々はベルンを選んだのか、ジュラを選んだのか。現代スイスのように宗教に寛容であるだけでなく実践信者の少ない国で、信仰が個人のレベルで州選の判断材料に大きく働くとは考えにくいのである。しかし、二者択一で票を投ずる今回のような方式では、あるいは、わかりやすさが、すなわち大衆的通俗さが唯一の指標になる宿命であることはあった。

\* \* \*

ジュラの「政治的被抑圧からの解放」劇をもう一度、振り返ってみよう。

ジュラの帰属問題は、ブルゴーニュ王がバーゼルの司教に南ジュラの修道院とその領地を献上したことから始まった。すなわち、自治ということがもし問題になるのなら、この時点こそ問題にすべきであるのに、ジュラ州政府はむしろここから一八一五年までを、どちらかというと創生神話的に扱っている。ジュラは司教領として緩やかな中世封建支配下に入り、その後いくつかの転変、特に宗教改革に国内が分裂をしたことなどがあったが、分離・独立問題などは発生しなかった。それは住民に帰属に関してのアイデンティティ意識など生まれていなかったからである。少なくとも、自覚的ではなかった。フランス革命のさなか、フランスに併合されるが、この時は、ジュラ人は、司教の世俗支配を断ち切る革命家だった。自らが選んだ道だった。一八一五年、ウィーン会議の戦後処理決定でスイスに返還され（あるいは、スイスに併合され）、ベルン州の領土となつてから、一九世紀を通して幾度か独立の機運が盛

り上がるがいずれも成就しなかった。独立、自治、そういうものが政治の世界で意味を持ち出した時代風潮にジュラとかかわりをもったベルンが不幸だったとも言えよう。今世紀に入って第二次大戦後ようやく具体的な運動に結集し始め、一九七四年、州民投票によりジュラ地方の分離決定するが、南半分のジュラ（地理的に言えばベルン側、南ジュラ）とラウフェンは分離を拒否。一九七八年スイス国民投票によりジュラの北部（北ジュラ）のみの連邦加入が承認され、一九七九年、スイス二三番目の州が誕生した。

この分離運動の全体像は、たとえ歴史的事実としても客観的に述べる事は困難である。どのように客観を装ってもバイアスがかかることは避けられない。それは「地」と「図」の読み取りにも似た不決定な要因があるからである。

これは、ここまで述べた経緯の包括的与件をふまえれば、明確なことであろう。この分離問題はたんに、ベルンとジュラの関係、北ジュラと南ジュラの関係のほか数多くの与件が混入してきている。もちろん、この分離運動は平板な「自治権獲得」という認識のみに支えられたものとしても見るわけにはいかないこともすでに述べたとおりである。結果だけから、分離に至った「北」と、ベルンに残留した「南」との、その過程で現れたジュラ人の選択肢を図式的に整理しておこう。

- a 「北」ジュラ人
- b 「南」ジュラ人
- 次に
- c 分離賛成
- d 分離反対

最後に

e 南北ジュラは同一の地方という認識

f 南北ジュラは異質の地方という認識

この単純なファクターだけでも論理的には八通りの組み合わせがあった（そのうちもつとも典型的なパターンは a / c / e と b / d / f の二つであつたろうが）。そうするとこの対立相手を、たとえば説得しようとしても、超えなければならぬ障害は多岐にわたる。分離という問題を設定した瞬間、事は錯綜したのである。「自治」というキーワードは彼らのアイデンティティの問題は解けない。またこのようにないわばマニアックなたえず下位へ分離の選択肢を延ばしていく彼らの行き着く先はどこだろうと言う興味もわく。さらに、アイデンティティのアイデンティティ以外のあるいは以上のなにかにむしろ創作されるのではないか、という疑問もわく。これらの問題については、七（「アイデンティティの円環」）でかんがえる予定である。

もう一つの明示的な差異を「言語」と「宗教」と「本籍」という三つのファクターに単純化して検証してみよう。まず、ジュラ人の母語と宗派の相関は次のとおりである。

	フランス語		ドイツ語	
カトリック	北ジュラ（ジュラ州）		ラウフェン（ベルン州）	
プロテスタント	南ジュラ（ベルン州）		ベルン州	

今、ジュラの、ベルンへの帰属（或は、からの分離）を眺めると、その選択基準は、「南」「北」を中心に据えて、結果だけから見る限りでは、言語問題でなく、宗教問題だったといえる。しかし、北ジュラとラウフェンを中心軸に据えれば、あきらかに言語問題であり、その両方を含みうる解は、p・q という連言命題になる。即ち、カトリックでかつフランス語の地域のみが分離し得た、と。

しかし、事は、もちろんそんなに単純ではなかった。言語について言えば、こういう世論調査の結果がある。<sup>(47)</sup>ドイツ語圏のスイス人の三六・六割がフランス語を流暢に喋れるのに対して、フランス語圏でも三八・四割がドイツ語を流暢に喋る。これはほぼ同率だ。逆に、フランス語を全く喋れないドイツ語圏のスイス人は二五・三割に対して、ドイツ語を全く喋れないフランス語圏のスイス人は三五・三割もいる。また両地域間に溝が深まっていると答えるドイツ語圏の人が九・三割に対して、フランス語圏では二七・三割である。もうひとつ、その溝の原因をドイツ語圏の人々はメンタリティの違い五四割、言語の壁三五・三割としているのに対して、フランス語圏では前者を六一・三割、後者を二八割としている。これらの数字から、ドイツ語圏のスイス人のいわば相互理解の善意の努力にもかかわらず、スイス・ロマンド人のマイノリティ意識による過剰防衛意識の可能性を読みとるのは強引だろうか。フランス語が軽視されているからドイツ語人種は抑圧者なのでなく、ドイツ語圏の人間を抑圧者だとする主観的位置づけから、フランス語が軽んじられているという物語が創出したと言えないか。<sup>(48)</sup>

その複雑な経緯にもかかわらず、北ジュラが最後まで分離する形を残し得たのは一種の排除法的結果であり、これは、アイデンティティの問題をかんがえる時に重要な与件となるかもしれない。すなわち、少しでも異物を排除していく純血制。（それが行き着く先は一人一州？　しかし、そのことは「民族」という文化集団によって保障され、自

＜地 区＞	カトリック	フランス語	本籍ジュラ
クルトゥラリ	24%	78%	33%
ムーチエ	39%	80%	38%
ラ・ヌーヴヴィル	15%	73%	37%
ラウフェン	87%	2%	46%
フランシュ＝モンターニュ	86%	88%	74%
ポラントリユイ	85%	90%	69%
ドゥレモン	80%	84%	59%

己に還元するアイデンティティと自家撞着する。この折り合いは、他者と均衡しているという実感が安定的に得られないかぎりカオスに到るまで続くのか？

次に、本籍を加えて、統計上の数字で示す上上の表のようになる。

スイスでは、制度上、本籍は変更が出来ない。いわばこれは顕示的エスニシティで、そのシンボル性はかなり強力である。

「カトリック、フランス語、ジュラ本籍」の三つはベルン州の支配的指標に対立するので、このファクターを分離指向の支配的指標として、上の表のパーセントをポイント化して単純に加算してみると次のようになる。

クルトゥラリ	一三五ポイント
ムーチエ	一五七ポイント
ラ・ヌーヴヴィル	一二五ポイント
ラウフェン	一三五ポイント
フランシュ＝モンターニュ	二四八ポイント
ポラントリユイ	二四七ポイント
ドゥレモン	二二三ポイント

はじめの四つの「地区」が反分離でベルンに残留し、あとの三つが分離を果たした「地区」である。<sup>(49)</sup> こういうの見えやすさは一体なにを意味するのだろうか。アイデンティ

ティはこれほど明瞭に形式的なものなのだろうか。それともこの形式は分離運動が作爲的に創出したのだろうか。ちなみにジュラ地方の平均値は一八五ポイントである。先に述べたように、ジュラ分離は五一・九割の賛成でかくも達成された。従つてこの一八五あたりが分離・反分離の分岐点となろう。「南」で行われた過激な分離運動は、敗北が自明の理の、あるいは身を棄てて「北」の分離を助けた一票へのけなげな執念だったのか。

多数決の原理と、個人に還元せざるをえないアイデンティティの接合はもともと不自然で、このような分離運動の収束の仕方に意味があつたのかどうかの問いとは別に、少なくともこの事が一応可能に見えたのは、スイスの政治的風土、すなわち中央の牽引力、求心力の希薄さのせいであろう。分子が拡散し、個の秩序の赴くまま全体の無秩序をつくる、エントロピーの法則の世界にそれは似ていなくもない。これは、おそらく、中央の權威に収斂する体系の中における個の領域境界のアイマイさが支配するオボロゲナ日本的無秩序といかにも対象的なもう一つの拡散する無秩序である。

〔以下『下』へ〕

## 注

(1) ドイツ語の「ユラ」の発音はテーマとして扱う地域の言語に鑑みて本稿では使用しない。注(5)参照

(2) ただし、ラウフェン地区のみドイツ語が支配的であり、かつジュラ問題にやや特異な位置を占めるので、以降とくに断らない限りこの地区はしばしば論外におかれる。たとえば、以下で述べるいわゆる残留地区を一般に「南ジュラ」と



称するが、ラウフェンに限ってこの通称からはずれる。

(3) 注(2)を参照。

(4) 「コミューヌ」と「地区」については三、「州」を参照。

(5) 原語を並記した場合は左が仏語、右が独語。ちなみにスイスでは公用語は独、仏、伊。国語はそれにレト・ロマン語が加わる。本稿では、扱う地域と問題がもっぱら独、仏の二言語にのみかわるので、この二言語以外の言語での複記はしていない。

(6) 『スイス連邦憲法』第三条

(7) district は行政・司法上の区分で、住民の自治は commune レベルで発揮されるシステムになっている。本稿では district を単独に用いる場合は「地区」、固有名詞と共に用いるばあいにはドウレモン地区のようにへへナシで表した。市町村は、コミューヌとした。

(8) 『スイス連邦憲法』第四三条

(9) Statistique de l'Industrie, Jura, 1985.

(10) 世界銀行年次報告、一九八八年によれば一位は、実際はバーミューダ諸島(約二八〇万円)だと言われるが、ここでは、独立国として国家の形態をとっている国を対象にした。

(11) Le Matin, 16 avril 1988

(12) Gazette de Lausanne, 5 nov. 1988.

(13) Journal de Genève, 23 juin 1984, 24 septembre 1988

(14) Journal de Genève, 3 mai 1980

(15) 例えば、一九八三年の国民会議議員選挙にデータを見ると、PSS/SPS (社会党)、POCH/POCH (進歩組織体)、PDT/PDA (労働党=共産党)、PSA/PSA (自治社会党)、PSO/SAP (労働者社会主義党)など、いわゆる「革新」得票率が、スイス平均の二七・五割に対して、ヘルン州ジュラでは六六・七割と際立って高い。

Strukturatlas Schweiz, 1986, Zürich

- (16) Résultats comparés des partis aux élections cantonales de 1978, 1982 et 1986 in La République et Canton du Jura, p. 51

(17) 『終末から』と『小説新潮』に連載後、単行本として出版された一九八一年八月時点では分離が達成されていた。

(18) バーゼル司教領は一〇三二年に神聖ローマ帝国に、他のスイスと共に組入れられたが、とくにこの地に行政上も文化上も変化はおこらなかった。

(19) 例えば、サン・チミエは一三五二年、ラ・ヌーヴヴィルは一三八八年にベルンと盟約を結んでいる。

(20) 一六九一年、一七〇二年。拒否の理由は、プロテスタント勢力の強いジュネーヴなどが一緒に加盟を申し込むことを恐れたためといわれる。

(21) ローラス＝ラウラキ族 (Rauraci) またはラウリキ族 (Raetici) に由来する共和国名は、ある意味では、ジュラの歴史的位置をよくあらわしている。ラウラキ族は、ローマ時代、ヘルヴェチア族と隣国どうしであったケルトの小部族で旧ベルンジュラとバーゼルジュラの北西に居住していた。紀元前五二年にローマ帝国との戦に破れ、その東半分がローマ領となり、Augusta raetica という都が定められたが、これが現在のアウグスト August (バーゼル・ラント州) である。しかし、この都も西暦二六〇年にアラマン族に滅ぼされた。この歴史的経緯もジュラの人々の気持ちに無意識のうちに象徴的な反・ドイツ語圏意識を形成するのに無関係だとは言えない気がする。すなわちゲルマンに侵略され滅ぼされるラテン＝ケルトという物語りの図式がここにも見られるからである。参考：JULIUS CAESAR: COMMENTARII DE BELLO GALlico 邦訳『ガリア戦記』(岩波文庫)。一・五、一・二九、六・二五、七・七五

(22) この両州は長らくベルンの領土であった、フランス革命のさなかに発足したスイス共和国は間もなく革命派と旧体制派との対立から内乱状態になった。それを口実にナポレオンが介入、調停法が導入された。この時にヴォー州とアールガウ州は、ベルンの手を離れ独立、一八〇三年スイスに加盟した。しかしベルンは必ずしもこれを承服していなかった。ナポレオンの没落を機に一八一三年二月二日オーストリア軍の後ろ楯で、ベルンは両州を再び支配下に戻す行動に

出ようとしたが抵抗にあった。この状況のなかでジュラの帰属問題が浮上してきたのであった。

- (23) 布告第三条、「スイス連邦はバーゼル司教公国が本邦に合併されることを願う意志を表してきた。仲裁に入った列強国も同地の命運を決定することを願ひ同司教公国とビエンヌの町ならびにその領有地は爾後ベルン州に帰属することに決まった」

- (24) Bireck 地区はバーゼル州に、Lignières の一部はメシャテルに組み入れられた。

- (25) 『合併報告書』Acte de réunion 第一九条。

- (26) この時のスローガンに“Séparation du canton de Berne!”という文言がすで見られる。

- (27) たとえば連邦レベルでも、高級官僚二・〇五二人（郵便・テレビ省 PTT と国鉄 CFE は除く）の母語言語分布をみると、ドイツ語七三・二割、フランス語二割、イタリア語三・七割でスイス全体の言語分布の七四・五割対二〇・一割対四割にほとんどきれいに比例している。最上級官僚（一九九人）でも、言語圏分布はそれぞれ、七八割、一九・五割、二・五割である。ただしこれに反する数字（高級官僚の定義の違いによる）もあって、それによると、それぞれ八一・三割、一六・三割、四割である。〈Les Romands sont-ils sous-représentés? Journal de Genève, 26 août 1979.〉

- (28) G.-A. Chevallaz, p. 81.

- (29) スイスの時計の九〇割はジュラ山脈の町や村で作られている。しかもその殆どが霧細企業の域を出ず、一九三五年をピークとした大不況期にたいへんな打撃を受けた。これは、ベルンとの経済格差是正で救済されうるものだったのだから。実際スイス全体がこの期間、輸出でみても、二〇年代の三分の二に落ち込み、繊維産業などは二〇年代の三分の一にまで低落した。スイス・フランの三〇割平価切り下げも一九三六年九月二十七日に行われている。

- (30) 分離運動のピークの一九七四年頃、ジュラ地方を歩くと至る所に赤いハートを形どった《Taine Jura》（ジュラを愛す）というステッカーが貼り付けられていた。一方ベルン州の旗やシンボル（熊）には赤インクが投げ付けられたりペンキで消されていた。自動車のナンバープレートにベルンの印にはジュラのシンボルマークがかぶせてあった。山膚にはジュラ旗の模様がまるで京都の大字のように描かれていた（これは最近旅をした時には消されていた）。子供達も

ジュラの旗をもって集会をしていた。高校生が新聞の切り抜きを誇らしげに見せてくれた。ムーチエから北の山奥の村々には「祝祭」のウキウキするような熱が沸騰していた。

- (31) ベグランは「南」のトラムラン「Tramelan」に一九二一年生まれ、ヌシャテル大学を卒業後、労働組合運動に専従、一九四七年ころからジュラ問題に取り組み、「ジュラ連合」Rassemblement jurassien〔後出〕結成、書記長を勤めるかわら「自由ジュラ」新聞を主宰する。現在も、ジュラ州議会議員として、「南」併合運動を続けている。彼の「証言」については六「文学・証言」でふれる予定。

- (32) ジュラとベルンの同一権利、ジュラ地区のフランス語公用化、ジュラ出身の大臣を二人置くことの明文規定。これらは採択された。その他の要望で例えばジュラ旗の公認やポラントリュイの司教座資料館などの復活などは州令で決められた。いわゆる「第二州会」の要求は採択されていない。

- (33) たとえば一九五二年九月六日の宣言文ではこれを鮮明にした。

- (34) 一九五二年一月に「南」のトラムラン「Tramelan」で結成。その主張は、ジュラの利害はベルン州の枠内でこそ守られるべきだというもので（たとえば一九五三年四月二五日制定の規約）、一九五〇年の改正憲法で十分とする。また、いわゆるバーゼル司教公国は近代の意味で言う国家ではなくジュラがその意味でかつて統一的な自治体であったことはない、とも言う。

- (35) 一九六〇年二月一五日ベルンの執行会議（内閣）はジュラの運動家が主張するような意味ではジュラの自治はこれ以上必要ないという方針を打ち出した。また一九六三年一月の「白書」でもカントンの統一性を問題にするような見直しは出来ないとした。

- (36) 投票は一九五九年七月五日に実施。

- (37) 「投票権のあるものとは当該地に三か月以上住んでいる州レベルでの有権者」（八条）、「投票主題の法制上の規定」（九〜一二条）、「憲法投票の規定」（二七条）「新州創設の投票実施の規定」（一八、一九条）、「連邦レベルでの新州加盟の賛否投票実施の規定」（二二条）など。

- (38) J. C. Renwald: *La Question jurassienne*, p. 88.
- (39) RJの三月一六日の声明『*Journal de Genève*, 17 mars 1975.
- (40) 一九八九年五月一三日付けの報道によれば、ラウフェンのバーゼル帰属についての住民投票が一九八九年一月二二日に行われることが決定したそうである。
- (41) 新憲法は一九七七年三月二〇日、賛成二七、〇六一票、反対五、七四九票で可決された。
- (42) *Message sur la création du jura*.
- (43) ヴェルラ村は一九八二年八月一日から自主的分離を強行し、「自由村」を名乗っている。『*Journal de Genève*, 3 août 1983.
- (44) 「ジュラ問題は決着がついていない」とする全州議会議員のロジェ・シャフテル Roger Schaffter などはその最右翼である。また「南」ではデモや反分離主義者との衝突、襲撃事件が頻繁に、まだ起こっている。
- Gazette de Lausanne, 16 mars 1987, 21 fév. 1988.
- | (45)    | 1910 年 | 1930 年 | 1960 年 | 1980 年 |
|---------|--------|--------|--------|--------|
| カトリック   | 37.8%  | 38.6%  | 41.9%  | 43.9%  |
| プロテスタント | 61.4%  | 60.0%  | 57.1%  | 50.4%  |
| その他     | 0.8%   | 1.4%   | 1.0%   | 5.7%   |
- (46) きちんと教会に行く (praticquant) のはプロテスタントで一半、カトリックで五割だと言われている。(ただし、自己申告してもらうと、二二・五割のスイス人がきちんと教会に行くと答えている)
- Fabien Dunand: *Dessine-moi un Suisse*, p. 56.
- (47) L'Institut MIS の「調査報告」(24 Heures), 11 mai 1987.
- (48) この種の「被害者(意識)同盟」は Association romande de solidarité francophone (ARSF) という組織がある。RJの書記長のベグランも副会長として名前を連ねている。この機関誌 (La Romandie) はその意味で本論のマイナ

に興味ある資料となっている。

(49) 一九八〇年統計によれば、こうやって分離をはたしたジュラ州のカトリックは五四、三一人でプロテスタントの八、六五五人、その他の二、〇一八人を引き離している。州人口の約八三・六割はカトリックとなる。一方、フランス語を母語とするものは五五、八五三人で、ドイツ語の四、〇六八人、イタリア語の二、七八五人、その他の二、一一九人をやはり引き離している。州人口の八六割はフランス語を母語としているのである。次に、カトリックでかつフランス語という連言が成り立つ人は、四八、〇三四人いる。即ち、州人口の七四割にあたる。また、さきの命題のいわば逆にあたるドイツ語が母語でかつプロテスタントの州人は、二、一一三人いて、州人口の三割を占める。しかし、この州でもドイツ語を母語とする人の五二割がプロテスタントだということは、あきらかに、ジュラでは、宗教／言語に高い相関がみられるといえる。なお、スイスで最もプロテスタント化が進んでいるのはベルン州で、ほぼ八五割がプロテスタント。一方、ジュラ州はカトリックの比率のもっとも多い州となってしまう。この予感が「南」を「脱落」させてしまったのだという「主観的」意見はしばしば聞かれた。しかしこれはそうとう慎重に分析をしなければならぬだろう。というのは「北」の人々は必ずしもカトリックとか宗派を大義とはしなかったし、また今日のスイスではカトリック・プロテスタントの宗教的軋轢はないからである。現にスイス全体の平均を見るとプロテスタント五〇・四割に対してカトリック四三・六割で、この均衡は健全ですらある。

Service de la statistique et de l'informatique de République et Canton du Jura, 1985: *Le Jura en chiffres*, p. 26.  
*Strukturatlas Schweiz*, 1986, p. 64.

\* \* \*

#### 参考文献

*Résultats du plébiscite du 23 juin 1974, modifications du pour cent des Oui par rapport au scrutin du 5 juillet 1959.*  
*Résultats du plébiscite du 16 mars 1975.*

- Résultats du vote du 24 septembre 1978.*  
*Constitution du la République et Canton du Jura, adoptée par l'Assemblée constituante le 3 février 1977 et par le peuple le 20 mars 1977 avec la modification du 5 avril 1987.*  
 Furgler et Huber, *Message sur la création du canton du Jura*, 16 novembre 1977.  
 J.-C. Renwald: *La question jurassienne*, éd. Entente, Paris, 1984.  
 Gouvernement de la République et Canton du Jura; *La Question jurassienne, une question suisse*, Delémont, 1986  
 La République et Canton du Jura; *Le Jura en chiffres*, 1985.  
 Vincent Philippe; *Le Jura République*, Lausanne, 1978  
 Claude Juillerat, Jean-François Nussbaumer, Claude Rebetez; *Histoire du Jura*, Fribourg, 1986  
 Chancellerie d'Etat; *La République et Canton du Jura, Porrentruy*, 1987.  
 La République et Canton du Jura; *Jura 23e canton*, Delémont, 1987  
 Fabien Dunand; *Dessine-moi un Suisse*, Lausanne, 1987  
 René Krusel, Daniel-L. Seiler; *Vous avez dit "Suisse romande"?*, Lausanne, 1984.  
 Georges Andrey et autres: *Nouvelle Histoire de la Suisse et des Suisses* 3 vol. Lausanne, 1983.  
 Peter Aebersold et autres: *La Suisse de la formation des Alpes à la quête du futur*, Lausanne, 1975.  
 G. Sausser-Hall: *Guide politique suisse*, Lausanne, 1947.  
 K. E. Brassel, E. A. Brugger; *Strukturalis Schweiz*, Zurich, 1986.  
*Dictionnaire historique et biographique de la Suisse*, 7 vol. +1 supplément, Neuchâtel, 1921-1934.  
*Dictionnaire géographique de la Suisse*, 6 vol. Neuchâtel, 1902-1910.  
 Fritz-René Allemann; *Vingt-six fois la Suisse*, Lausanne, 1985.  
 P.-O. Walzer et autres; *Jura-Ecriture-Identité*, Lausanne, 1981.

- J. R. Fiechter et autres: *Le Jura-Sud à la recherche d'une identité*, Moutier, 1977.
- François Peyot: *La Suisse en Transparence*, Genève, 1976.
- G. -A. Chevallaz: *La Suisse est-elle gouvernable?* Lausanne, 1984.
- J. -J. Luthi et autres: *Dictionnaire général de la francophonie*, Paris, 1986.
- Georges Grosjean: *Historische Karte der Schweiz*, Bern, s. d.
- 新聞記事 (雑誌「ヤマト」の「スイス」) <Journal de Genève>  
 1. 2. 75/7. 3. 75/ <Democrate> 8. 3. 75/17. 3. 75/16. 4. 75/16. 6. 75/22. 12. 79/3. 4. 80/29. 5. 82/15. 5. 83/14. 8. 83/17. 3. 84/24. 6. 84/28. 4. 85/16. 3. 87/21. 3. 87/ <24 Heures> 15. 5. 87/7. 8. 87/13. 8. 87/6. 12. 87/20. 12. 87/ <24 Heures> 6. 2. 88/28. 2. 88/ <Le Matin> 16. 4. 88/14. 8. 8824. 9. 88/2. 10. 88/5. 11. 88/17. 12. 88/26. 12. 88/5. 3. 89/27. 3. 89/16. 4. 89/20. 8. 89.  
 <La Romandie> (Association romande de solidarité francophone/Mouvement romand): Premier numéro (avril 1981)→  
 31e numéro (juillet 1989), Nyon.

(à suivre)